

# 岩村城跡調査の概要 改訂第4版

2011. 11. 10 恵那市教育委員会文化課

## ■ 調査の目的

岩村城跡の今後の国史跡指定、保存や整備に向けた基礎的なデータの収集  
基礎的なデータとは、

- ① 城山の環境
- ② 城山の地形とそれをうまく利用した城の範囲（縄張り）の把握
- ③ 石垣の位置と状況
- ④ 石材をどこで調達したか
- ⑤ 城山の上に、最初に城を築いたのはいつごろか
- ⑥ 山をどのように削ったり掘ったりして城を作ったのか
- ⑦ 現在のような立派な石垣を持つ城に整備されたのはいつか
- ⑧ 最初にあった城をどのように改造、整備していったのか
- ⑨ 廃城後から今日に至るまで城に手が加えられているが、昔の遺構はどの程度残っているか

## ■ 調査の経過と成果

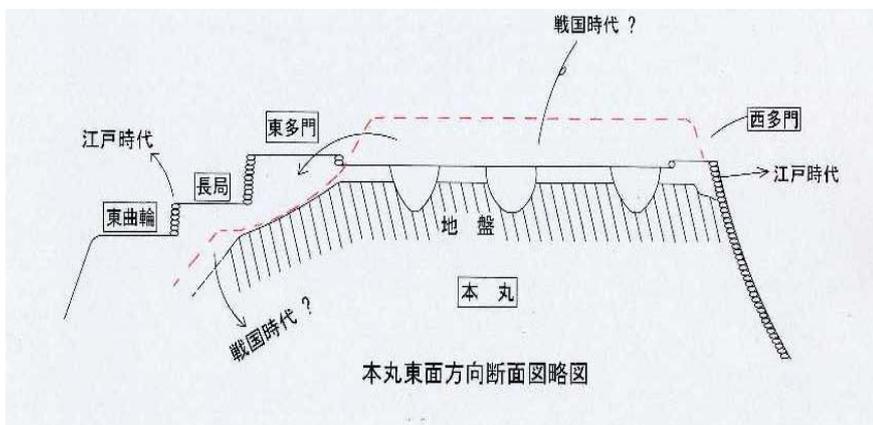
（平成20年度）

- ・ 城山全体の植生調査を実施し、植生の特徴と植生管理の課題を抽出
- ・ 城山全体の地形及び遺構測量（縄張り調査）を実施し、1/250、1/500測量図を作成
- ・ 石垣一面一面の悉皆調査を行い、通し番号をつけカルテを作成。226面の石垣を確認。併せて、恵那地域の石塔の調査も実施
- ・ 本丸東側の石垣（六段壁）と北側の野面積みに近い石垣の三次元測量図を作成

以上は、国交省のまちづくり交付金事業で実施

以下、発掘調査は文化庁の国庫補助事業で実施

- ・ 本丸から長局にかけて東西に幅2m、延長約48.5mの調査区を設けて発掘調査を実施。調査期間は、10月10日～11月20日、調査面積は97㎡。本丸広場は、廃城後さまざまな用途に利用されていたため、かなり攪乱されていた。東側の多門櫓と長局は、本丸を削った土を埋め立てて造られていた。出土品か



ら、戦国時代の本丸を削って東側を埋め立てて拡張し、長局、東側の多門櫓を造ったことが判明した。拡張の時期は、岩村藩初代松平家乗の入部後と考えられる。

### (平成21年度)

本丸南側の戦国時代の曲輪とされる尾根（通称南曲輪）において、堀切の一部に幅2m、延長約18mの調査区を設定し調査を行った。本丸は、平成21年度調査区の南側に南北に幅2m、延長約20m調査区を設定して調査を開始し、遺構の検出状況により、一部拡張しながら54㎡を発掘した。調査期間は11月2日～12月18日。

#### 一本丸南尾根の調査－調査面積2m×18m＝36㎡。

- ・ 本丸南側尾根の付け根の部分は明和3年の岩村城平面図では屋敷地となっており、江戸時代にも利用されていたことが分かるが性格は不明。屋敷地部分はすべて岩盤で、掘割も岩盤を削って造られていた。また、掘割の東端は、江戸時代に埋め立てられて土橋状になっていた。
- ・ 硬い岩盤を掘り割ったところには、数ヶ所に火を焚いた痕跡がしっかりと残っていた。石を熱して割る手法は古くから（奈良時代）知られているが、「岩盤を削って掘割を造った山城は多数あるが、岩盤をどのような方法で取り除いたかがはっきりと分かる事例は初めてではないか」（NPO法人城郭遺産による街づくり協議会理事長 中井均氏の11月20日現地視察時コメント）ということで、貴重な事例のようである。
- ・ 堀底よりやや上に堆積した炭化物の樹種同定と放射性炭素年代測定を行ったところ、樹種はクリで、これが伐採された年代は15世紀中頃～後半の可能性が高いという結果が得られた。



#### 一本丸の調査－ 調査面積 合計54㎡

- ・ 地山は風化した花崗岩の岩盤で、南から北へ徐々に低くなっている。
- ・ 南側の一段高い所は、赤い粘土質の土で丁寧に整地されている。この整地層の上面で15世紀末ごろの山茶碗の破片など少量の遺物が出土した。遺物の時期は、岩村城が築かれていたことが確認できる史料（城内八幡宮に残る遠山頼景の棟札）の年代（1508）に近い。遺構は発見されていないが、この時期に城があったことの証左となる。→掘割出土炭化物（クリ材）の年代測定値ともほぼ一致
- ・ 赤い粘土質の整地層は、南側と東側では表土



直下まで厚く残っている。この整地層は、関が原合戦後の大給松平氏入部後に行われたものと考えられる。

- ・ 南端で絵図に描かれている塀と塀を支えた柱の基礎を検出。土壁と思われる塊が出土した（写真）。
- ・ 北側の広場部分は、岩盤の上を赤い粘土層で整地した後、さらに異なった土で埋め立てており、時期を違えて整地が行われたことが推定される。
- ・ 明和3年岩村城平面図を詳細に観察するとさまざまなことが分かる。例えば、二重櫓の南東角は石垣からはみ出している、二重櫓南下の帯曲輪石垣の一部(16m分)は、明和3年の絵図では描かれていない。ちなみに本丸北東側の六段壁も同様である。

### (平成22年度)

出丸西方尾根の先端の石切丁場推定地の確認のため、本丸では未調査の北半部分の造成と石垣基礎の状況の把握のため、八幡曲輪では侍屋敷跡の状況の把握のため、それぞれトレンチ調査を行った。

#### 一石切丁場推定地の調査一 調査面積 13.4㎡

- ・ 人為的なくぼみにトレンチを設定して掘削したところ、くぼみの中はかく乱されて、前面に広がる緩やかな斜面には掘り出された土と石（排土）が堆積しており、くぼみの中や周辺には摂理に沿って人為的に割られた人頭大～直径50cm程度の石が散乱している。
- ・ トレンチの脇では、1点のみであるが、矢穴（石を割るために打ち込んだ鑿の跡）のある石が見つかった。
- ・ これらから、このくぼみは石垣の石材を採石した痕跡と考えられ、この場所が採石場であるとみることができる。
- ・ 採石場の年代は、陶磁器等の遺物が出土しておらず直接的には確認できなかった。矢穴の形状は、本丸等の石垣のうち18世紀以降に修理されたと考えられている石垣に見られる矢穴の形状と類似する
- ・ これらから、築城当初の採石場ではなく、江戸時代中期以降に石垣の修理・補修のための石材を採石した採石場と推定することができる。
- ・ 岩村城の石垣は、享保3年（1718）の大地震をはじめとする自然災害によりたびたび崩落し、そのたびに修理を加えながら現在に至っている。今回の調査では、そのための石材が外部から搬入されたものではなく、城山の中で調達されたものであることを確認した。全国的にも石垣の石材の採掘地が明らかになっている例は少なく、補修用とはいえ、採掘地が確認された意義は大きい。また、江戸時代を通じて、岩村城がどのように維持



管理をされてきたかを知る資料としても貴重である。

#### 一本丸北半の調査 調査面積 50.0㎡

- ・ 本丸内部は、表土直下が風化した花崗岩の岩盤となっており、明確な整地面や遺構は検出されなかった。遺物も非常に少ない。
- ・ 埋門の通路が地山を掘り抜いて築かれていることが判明した。
- ・ 本丸上段の石垣は、地山を岩盤まで掘削し、岩盤の上に直接石が置かれていることが判明した。
- ・ 下段の石垣の上端では集石が見られた。土塀の基礎の一部である可能性があるが、石垣保護のために端部の調査を行っておらず、確定はできなかった。



#### 八幡曲輪五郎左屋敷の調査 調査面積 40.0㎡

- ・ 明和城絵図（明和3・1766）に「河合五郎作」と表記され、他の絵図にも侍屋敷の表記のある曲輪を調査した。
- ・ 石列を検出し、多数の陶磁器片が出土した。石列の性格は不明であるが、幕末までこの曲輪が生活の場として機能していたことが判明した。
- ・ 山の斜面を大規模に造成して平坦面を作り出していることが判明したほか、盛土の地下で切岸（斜面を削って急傾斜にした城壁）と認められる斜面が確認された。この曲輪に先行する城の遺構（時期不明）の可能性もある。



## 第4次岩村城跡発掘調査（平成23年度）の目的

### 【八幡曲輪龍神社裏】

- ・ 二重櫓及び土塀の遺構を確認するとともに、規模や構築方法を把握し、建造物の規模や構造を推定するための資料とする。
- ・ 江戸時代以前の遺構の有無を確認する。

### 【一ノ門左の侍屋敷跡】

- ・ 『濃州岩村城并居屋敷家中屋敷町屋敷絵図』（享保ごろ）では河合六郎左衛門、『岩村城平面図』（明和3年・1766）では松岡勝之進の居宅と記されている平坦面である。この侍屋敷の遺構を確認する。
- ・ 平坦面の造成方法を確認する。
- ・ 『正保絵図』のみに北西コーナーに二重櫓が描かれている。その遺構の有無を確認する。